目次

序章……3
一　習合研究と本書の視座……3
二　本書の概要……6
第一章　神仏習合と儀礼空間……15
第一節　神仏習合の基本形態……17
第二節　社寺行幸と天皇の儀礼空間……22
はじめに……22
一　賀茂行幸――神前に立たざる天皇――……25
二　行幸と御幸の相違点……31
三　古代の寺院行幸――地域不入の天皇から拝跪する天皇へ――……35
四　中世最後の神社行幸――後醍醐天皇の例――……42
まとめ――王権と神祇の関係――……46
第三節　神宮寺の神祇奉斎――神仏習合の源流を求めて――……51
はじめに……51
一　多度神宮寺の「神御像」……52

二　松尾神宮寺の旧神像……55
三　熱田神宮寺の神像図と神祇……59
四　日吉神宮寺の「影向山王」……63
五　石清水・護国寺の「大菩薩御体」……65
おわりに……69
第四節　仏教空間における神祇……72
はじめに……72
一　東大寺における神祇関係……73
二　神護寺における神祇奉斎……84
三　長谷寺の神祇奉斎……91
四　天台の神祇奉斎と神祇勧請……93
第二章　神前読経と経典……105
第一節　大般若経の伝播と神仏習合……107
一　日本における大般若経の受容……107
二　神祇と大般若経――道行願経の出現――……108
三　神祇法楽経としての大般若経――神宮寺と大般若経――……111
四　神祇と大般若経……113
まとめ……125

第二節　中世における神前読経の場……128
はじめに……128
一　伊勢神宮における神前読経……129
二　賀茂社の神前読経……132
三　春日社の神前読経……135
四　日吉社の神前読経……137
まとめ……139
第三節　一宮・惣社における仏事と大般若経……141
はじめに……141
一　一宮・惣社における仏事……142
二　一宮・惣社と大般若経……149
三　惣社の経蔵……155
まとめ……156
第三章　神職系図の研究……159
第一節　伊勢神宮の神主系図……161
はじめに……161
一　仏教の接近……162
二　出家神主の出現……164

三　受容の諸相……171
四　天照大神と本地仏……174
おわりに……176
第二節　『津守氏古系図』の研究……179
はじめに……179
一　『津守氏古系図』の諸本とその検討……180
二　津守氏の出家者……184
三　出家神主の出現……185
四　退下後の出家神主……191
五　輩出する僧尼たち……193
まとめ――出家を支えたもの――……207
第三節　上賀茂神社系図の研究……214
はじめに……214
一　『賀茂社家系図』と『社務補任記』の史料批判……215
二　聖神寺の建立……217
三　習合の深化と展開……220
四　「入道神主」の出現と堂塔の建立……223
まとめ――近世の縫承――……232
第四節　若狭彦神社社務系図の研究……237

はじめに……237
一　習合の実態……239
二　神主の出家――十二代景継にみる――……244
三　光景とその周辺……249
まとめ……252
第五節　宇佐八幡宮の神主系図……254
はじめに……254
一　奈良時代の宇佐宮……255
二　宇佐宮の系図史料……256
三　宇佐宮の仏教……258
四　平安時代の仏教受容者……260
五　造像と結縁者たち……266
六　仏事法会の始修……269
七　鎌倉時代の出家者たちと帰依者……271
まとめ……274
第四章　洛中洛外の神仏習合……277
第一節　鴨社の神仏習合……279
はじめに……279

一　賀茂神宮寺成立の背景……280
二　岡本堂をめぐって……286
三　神宮寺の成立と発展……290
四　近世の神仏習合……305
五　神宮寺の終焉……323
第二節　祇園社の成立と観慶寺……335
はじめに……335
一　祇園社の当初形態……336
二　「神殿」と「堂」の並存……339
三　祇園社（観慶寺）の天台化……342
四　観慶寺の性格と位置……348
第三節　天龍寺の鎮守社霊庇廟について……354
はじめに……354
一　発掘調査による所見……355
二　霊庇廟創建とその周辺……356
三　後醍醐天皇・夢窓国師・足利尊氏と霊庇廟……362
終章……367

史料編……371
一　神仏習合年表……373
二　大般若経年表……375
後記
索引（人名／社寺名・地名／事項）

序　章

一　習合研究と本書の視座

六世紀における日本への仏教伝来がもたらした文化的・宗教的影響には、はかりしれないものがあり、あらためて言うを俟たない。とりわけ日本の在来の信仰に与えた影響は強く、カミ信仰の形態、およびカミ観念に刺激と変容をうながすものであった。カミと仏の違い、異質のなかにも共通するもの、そうした比較、点検作業のなかから日本人はみずからのカミの自覚と再認識を深めた。そしてついには仏を「他国の神」と認識するにいたったことを『日本書紀』はしるしている。ここにカミと仏に相違はあっても、相争うものでなく対立と相克を超えた調和の関係におかれ、時間的経過のなかで接近することにそれほど多くの時間を要しなかった。具体的には、カミはそれまで樹木・岩・泉・山・川などに宿り、ヒモロギ・イワサカ祭祀など自然のなかで祭祀を行ってきた。しかし仏すなわち仏像の出現によって、カミを彫像化し神体を成立せしめ、また仏像が仏堂にまつられ荘厳されるように、神殿に神体をおさめ、そしてまつった。カミもまた雨露をしのぎ、神殿に常住する、いわゆる「自然神道」から「社殿神道」へのあらたな祭祀形態を創出したのである。これは従来のカミ信仰にとって画期的なことであった。いまわれわれが「神道」「神社」の一般的姿としてみているものは、六世紀以降、仏教によって刺激をうけ創出したあらたな形態というべきだろう。

こうした仏教の受容はさらなる展開をみせる。それはカミと仏の一体化、さらに同体とみなし、仏が本体でカミは仮の姿とする「本地垂迹」説を生む。ここからまことに多彩な神仏習合という現象が日本を席巻してゆく。後述するが神仏習合の言説である本地垂迹が成立するのは平安時代初期とみるが、全国的普及をみたのは平安時代中期とみたい。以後、中・近世を通じて展開し、近代の幕開けとなる明治元年の神仏分離まで約一〇〇〇年近くの間、神仏の習合関係をふかめ継続したのである。

さて、この近代の幕開けにさいして決行された神仏分離事件を契機として、皮肉にも神仏習合を歴史的にとらえる研究が進展した。ここで神仏習合をめぐる研究状況を概観しよう。本問題は古代・中世における日本宗教史、ないし日本思想史上の重要な課題であって、すでに辻善之助は明治四十年（一九〇七）の『史学雑誌』において先駆的論文「本地垂迹説の起源について」を発表してその先鞭をつけた。これは基本的研究として、今読み返しても色褪せておらず、すぐれた古典的研究の位置を与えられている。さらに辻は習合史をめぐる、もう一つの優れた作業の一翼を担った。日本宗教史上かつて例のない、熾烈を極めた全国的な神仏分離の被害状況とその結末をはっきりさせるため、辻をはじめ村上専精・鷲尾順敬を中心に『明治維新神仏分離史料』を編纂した。これには全国各地から関係者の協力を得て、幅広く聞き書きや手記、隠滅した史料の発掘と収集を行った。この作業は、廃止された神仏習合状況の確認であり、残された史料による復元でもあった。辻の世代にとって、神仏習合はついこの間まで普遍的にあった、一〇〇〇年にわたる日本宗教の常態であって、いわば暴力によって破壊されたその実態を後世に伝えたい、という義憤のごときものが作業の動機であったろう。一体、分離によって何が失なわれ、何が変わったのか。こうした残存史料を収集し被害状況の記録といった一方の作業を経て、はじめて成しうることであった。辻はこのあと大著『日本仏教之研究』（一九一九）・『日本仏教史』全十巻（一九四四～六〇）を通史としてまとめる。以後、習合に関するものは、清原貞雄の『神道沿革史論』（一九一九）・『神道史』（一九

三二)、宮地直一の『神祇史要綱』(一九一九)・『熊野三山の史的研究』(一九五四)・『八幡信仰の研究』(一九五六)・『諏訪神社の研究』(一九八五)などが戦前の主なものであろう。戦中をはさみ宗教民俗学の立場から堀一郎『我が国民信仰史の研究』(一九五三)、桜井徳太郎『神仏交渉史研究』(一九六八)、村山修一の『神仏習合と日本文化』(一九四二)・『神仏習合思潮』(一九六七)・『本地垂迹』(一九七四)、原田敏明『日本宗教交渉史論』(一九四六)、宗教文化史とりわけ美術史学の立場から景山春樹の『神道美術の研究』(一九六二)・『神道美術――その諸相と展開』(一九七三)、彫刻史から岡直己『神像彫刻の研究』(一九六六)、久保田収の『中世神道の研究』(一九五九)・『神道史の研究』(一九七三)、中野幡能『八幡信仰史の研究』(一九七五)、萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』(一九七五)、高取正男『神道の成立』(一九七九)、建築史から土田充義『八幡宮の建築』(一九九二)、西田長男『日本神道史研究』全十巻(一九七八～九)をはじめとする著作群が著わされた。さらに一九九〇年代に入ると、天台の思想教理史から菅原信海『山王神道の研究』(一九九二)、佐藤真人の日吉山王社を中心とした一連の論考、新しい習合建築の概念からアプローチした黒田龍二『中世寺社信仰の場』(一九九九)、逵日出典『神仏習合』(一九六一)がある。これらを代表とするさまざまな角度からの神仏習合をめぐる百花繚乱ともいうべき著作・論考が蓄積されている。筆者もこうした先学の業績に学び導かれながら、まずは日吉社を中心に研究をすすめ『日吉大社と山王権現』(人文書院、一九九二年)を上梓した。研究はさらに笹生衛の『神仏と村景観の考古学』(二〇〇五)と考古学の立場から丹念な習合研究のあたらしい成果も公刊されている。

これまでの研究は、辻善之助によって切開かれた日本宗教史の重要な側面としての神仏習合の総体的な把握であった。そして先に掲げた仏教史、神道史、思想史、宗教民俗学、美術史、彫刻史、建築史、考古学といった各分野から習合現象の研究が深められてきた。そしてこうした関連諸学による学際研究から、ほぼ習合史の全体像が明らかとなり、ふたたび個別事例の検討に立ち返り検討する段階にあるといってよいだろう。

本書は、こうした先学の成果を踏まえながら、神道史の立場から多彩な神仏関係を事例に求め、研究をすすめる。そのさい、歴史的な実態調査につとめ、あらゆる宗教は儀礼と施設もって表現されるとの基本理解に立ち、とりわけ可視的な宗教空間において神・仏はいかなる態様をとったか、すなわち儀礼空間における神仏習合を明らかにしようとした。

二　本書の概要

先の研究動向をうけ、以上の方法のもとに取り組む、本書の構成と概要は次の通りである。

第一章　神仏習合と儀礼空間

王権と神仏との関係の有り様、神宮寺内にまつる神祇、寺院内の仏事法会にまつる神祇など具体的事例によって可視的に宗教空間を把握する。

第一節　神仏習合の基本形態

神仏習合はいかなる過程をへて、どのよう形態を生んだのか。神仏習合の具体的モニュメントである神宮寺、鎮守社、そして宮寺の基本的位置づけを行い本論の前提とした。

第二節　社寺行幸と天皇の儀礼空間

本節では、王権の神仏に対する対処の違いを、神社行幸と寺院行幸にしぼり考察する。天皇の参入する儀礼空間は神仏によって根本的な違いがある。天皇は神祇の場合、門内には近づきながら神域内には頑なに参入せず、代理者をして参拝、奉幣をつとめる不文の習わしがあった。他方、寺院空間には神祇空間と当初はおなじであったが聖武・後醍醐の両天皇は、寺域はおろか内陣にまで参入している。注目されるのは、在位中には門前の仮屋

にとどまった天皇が退位し上皇になった途端、神域に参入していることである。賢所（かしこどころ）の天照大神の祭祀を専権、任務とする天皇は他の諸神祇は畏敬しても拝脆しない不文律があったとみたい。こうした王権側の神仏に対する天皇と上皇の空間的相違を述べる。

第三節　神宮寺の神祇奉斎

神宮寺は神域内、もしくは周縁部に立地する寺院で、神仏習合の中心センターとしての機能と役割を果たした。ところがその内部空間に、さらに神祇を奉斎する事例がいくつか認められた。いわば二重祭祀であるが、その発生原因ともたらす意味を明らかにした。仏教側の文字通り神祇の取込み策、みずからの手で獲得した神宮寺という自己空間で神祇をみずからの手法で祭祀を実現した。神域内、もしくは周縁部で獲得した神宮寺という存在、さらにその内部で神仏は一体であり融和することを示した影響はきわめて大きい。

第四節　仏教空間における神祇

東大寺の造立にみられる鎮守八幡宮の創建は、その後の寺院にみられる鎮守社の成立をうながす先駆的意義を持つものであった。さらに二月堂周辺に関連の鎮守社を配し、内部空間である修二会（しゅにえ）の法会の場に神名帳を奉唱し神祇勧請を行った。さらに神護寺金堂の内陣に八幡大菩薩神影図を常時掲げたが、これは空海の思想信仰に基づくものであった。長谷寺本尊の両脇持には春日・伊勢の本地像を配置した。葛川明王院の本堂内陣に祀る七所大明神、西教寺の法会・戒灌頂における山王曼荼羅の奉掛などいずれも寺院内における多彩な神祇勧請の事例である。本来、仏教の内部空間に神祇は不要である。にもかかわらず、あえて仏教は神祇勧請にふみきった。こうしたさまざまな仏教空間における神仏習合の多様な実態を明らかにする。

第二章　神前読経と経典

神前読経は歴史的にもっともポピュラーな習合儀礼であるが、延暦十三年（七九四）の宇佐・宗形社に僧を派遣せしめたというのが初見である（『類従国史』）。神祇の場へのもっとも積極的な儀礼での進出といえよう。神前に唱える読経の声は神仏が調和する様を体現するものであり、習合化に果たした役割はきわめて大きく、諸経のなかで圧倒的に大般若経が多く用いられた。

第一節　大般若経の伝播と神仏習合

大般若経が神前読経に用いられた初見は八世紀中葉にさかのぼるが（『東大寺要録』道行願経）、正史にあらわれるのは九世紀初頭である（『日本後紀』）。神祇の前に仏教経典を読むことは、神仏分離を経た今日からみて一見理解しがたいが、最も多用されたのは大般若経である。同経は六〇〇巻からなる大部の経典にもかかわらず、神前読経、とりわけ初期神宮寺には必備のものであった。シャーマン僧満願が鹿島・多度両神宮寺の創建にかかわり、そのさいもまず同経の書写をし、そして常備したことが確かめられた。大般若経はその後も中・近世を通じて神前読経に供された。文献史料とおびただしい同経の書写奥書の集成につとめ、中世までに限定した神祇関係の「大般若経年表」を作成し巻末におさめたので参照されたい（三七五頁以下）。

第二節　中世における神前読経の場

こうした大般若経を中心に神前読経が実修されたのであるが、いったい具体的にどこで読誦されたのか。社殿の大床、浜床、拝殿、社頭の庭上なのか、あるいは神域内の神宮寺なのか、神前という以外に明確ではないのである。僧侶は神祇の場のどこまで参入して読経したのか、じつは神仏の習合と隔離意識を推し量る上でもその場の意味するところは大きい。ここではなかなかとらえがたい神前読経の場を絵図史料と文献史料によって空間的にとらえた。たとえば賀茂両社のうち上社では橋殿、下社では舞殿と祭文座（宣命の座）と読経の座が同一で

あった。習合色の色濃い春日社では御廊・中門で読経されていたが、瑞垣内に参入しない慣わしであった。習合を許容しつつも厳しい隔離意識が貫徹し内院は区別されていた。

第三節　一宮・惣社における仏事と大般若経

国々に鎮座する一宮・惣社で国衙祭祀とともに仏事も執り行われた。国司の就任儀礼として神事につづいて仁王会を行うなど、いわば神仏双修であった。また遺品として大般若経奥書によって一宮・惣社関連の経典であることをしめし、またこれらを収蔵する経蔵の存在もわずかだが確かめられた。そしてこれらの事実から国司等を通じて地方に中央における神仏習合が伝播したことを推定した。

第三章　神職系図の研究

系図史料はまま偽作・改竄が行われやすいため危険な史料とみなされ、低くみられるのが一般的である。その意味で注意を要するが、もし一定の事実性が確かめられ、さらに他に得がたい史料価値があるとするなら捨てがたい。本書でとりあげる有力神社の神職家に伝えられた五神社の系図は、神職の出家という予想外の出来事をしるしている。むしろ他に求めがたい史料であり、これらをつぶさに検討するとき、生きた神仏習合史を描きうる。

第一節　伊勢神宮の神主系図

伊勢の神宮には内外両宮にそれぞれ荒木田・度会系図があるが、仏教を忌避し『延暦儀式帳』『延喜式』に忌言葉の規定があるにもかかわらず、両系図には平安時代中期にはあいついで両宮とも出家者を輩出したことをしるす。これを補う史料として朝熊山経塚の神宮神主の名をしるした経筒、荒木田の名と保安二年（一一二一）銘の伊勢中村町の大般若経などがある。一般的に仏教を忌避するとされる神宮ですら、神域に仏教は入らないものの、神主自身が氏寺を持ち、写経し、経典埋納など仏教に帰依する実態を知りえた。中世における神宮神主の仏

教にたいする建前と現実の実態が知りえた。

第二節　津守氏古系図の研究

津守氏は住吉社の社家で古代より海の神を祀り、遣唐神主を出すなど開明的な古代氏族であった。また多くの歌人群を輩出したことでも知られるが、いっぽう住吉社の社家としてだけでなく、住吉神宮寺の堂塔伽藍にも僧尼として配置したことはあまり知られていない。住吉社は四本宮を中心に諸社殿を構成されるが、ほぼ同規模の仏教伽藍があり、さらに周辺にも寺院・寺庵があった。同家に伝わる『津守氏古系図』を詳細に点検すると、同社だけでなくこれらの寺々にも津守氏の次男以下および子女たちが僧尼として仕えていた。同氏は神・仏双方に人員を配した実態が知りえた。

第三節　上賀茂社系図の研究

王城鎮護の社として知られる上賀茂神社の社家は十六流があって、それぞれが自家の系図を所有していた。これに六年の年月を費やし相互検討を加え浄書・完成したのが、全十六巻からなる重要文化財『賀茂社家系図』（賀茂同族会所有）である。本巻は諸処に他に求めがたい事実をしるし、いたずらな排仏意識にとらわれず、仏教的記事をふくむ。本系図とこれを補う『社務補任記』に十二世紀初頭、それぞれ二人の「大入道神主」をしるし、中世を通じ五十余名が「入道神主」「出家神主」「神宮寺神主」として明記される。いずれも神主でありながら一定の仏教思想を受容していたとみるべきだろう。これと対応するのが『上賀茂神社絵図』（同神社蔵）に描く、神域内の神宮寺（観音堂）、経蔵、鐘楼、読経所などの習合施設である。さらに賀茂社の周辺部に聖神寺、神光院、正伝寺、妙観寺などの氏寺が建立されている。いっぽう九世紀中頃から神前読経がなされ十一世紀末には法華三十講、仏名会などが始修される。このようにさまざまな観点から賀茂社に名実ともに神仏習合化がおよんだことがわかる。とりわけ出家、および入道神主の存在は中世における仏教の内部受容が神職団に相当にすす

んでいたことをうかがわせる。

第四節　若狭彦神社社務系図の研究

若狭国一宮の若狭彦神社・若狭姫神社の社家系図『若狭国鎮守一二宮社務代々系図』（重要文化財）は十四世紀後半に成立し、女性名を明記するのが特徴で、牟久一族から出家神主をはじめとする僧尼の輩出した事実をしるす豊かな内容である。神宮寺があり、社家の祖節文が若狭のヒコ神・ヒメ神が鎮座のおり随従し、遠敷に初現の地を神宮寺としたという伝承をもつ。同系図によれば、やや伝承的だが十一世紀中葉に最高職の禰宜が出家し、確かな出家神主の初見は十二世紀中葉である。以後、同系図の記載者二七四名のうち、僧五十三・尼一名、のちの出家者のうち男性九名・女性二名をかぞえる。その人的配置先は神宮寺をはじめ国分寺、多田薬師堂、国衙の常満供僧などである。大づかみだが、中世を通じ牟久一族のうち二十四％が広義の出家者であった。さらに興味深いのは出家作法をしるすことで、一社の祭祀を統括した禰宜が出家という仏教への自己投企にさいして、みずから最後の報告祭で「暇申し、出家しおわんぬ」と礼をつくしたあと廻郎で剃髪を行った。神仏習合期における神主の出家という理解しがたい事実、そして神仏の狭間に立ち神域で「いとま申し」てケジメをつけ帰依する微妙な有り様に、中世の習合の実態が読みとれる。

第五節　宇佐八幡宮の神主系図

宇佐八幡宮は全国の八幡宮の総本宮として、また宮寺の代表的神社としても知られる。広大な境内には社殿群とともに、神仏分離以前までは神宮寺の弥勒寺が伽藍を配し、これに堂塔もくわえて濃密な神仏習合の宗教的景観を展開した。

宇佐八幡宮の神職には宇佐・大神・辛嶋の各氏が神職団を形成しそれぞれの系図をつたえる。これをみると宇佐氏の弥勒寺を開創した法蓮、平安時代中期に天台座主に就任した義海、求菩提山の頼厳上人などの僧、出家者

を輩出したことを知りうる。さらに宇佐八幡宮の神職が造寺造塔とともに内外の仏像の造像施入にも参画し、さらには神事は当然のことながら多くの仏事・法会も生み出している。

こうした系図という内部史料を通じて宮寺における神仏習合の実態を明らかにしたい。

第四章　洛中洛外の神仏習合

中近世を通じ都でありつづけた京都における神仏習合はいかにあったか。宗教は中央から地方へ波及したという図式はあてはまらないが、政治・経済とともに文化の発信源であったことは間違いない。鴨社、祇園社、天龍寺の鎮守社の三か所を選んでその神仏関係をとりあげた。

第一節　鴨社の神仏習合

本節では鴨社（賀茂御祖神社）の神仏習合を通史的にみた。時代ごとの限定した時代史的アプローチは、研究方法の基本である。いっぽう通史的研究も歴史事象の変遷を把握する上でこれまた必要である。上賀茂神社とともに王城鎮護の社として知られた下鴨神社は賀茂祭をともに行うなど、両社は一体的関係にあった。そこで鴨社の習合を通史的にながめてみた。

『知識優婆塞貢進文』は、八世紀に両社を支えるカモ氏出身の青年たちが平城京で経典書写や習得につとめていたことを示す。九世紀には賀茂の地に道場（岡本堂）がもうけられ（『続日本後紀』）、鴨社への神前読経がなされ仏教の浸透をうかがわせる。鴨社における神宮寺の初見は十一世紀初頭（寛弘二・一〇〇五）だが（『小右記』）、十世紀末までさかのぼる。以降、中世の状況を描く『賀茂御祖神社絵図』を点検すると、境内中央に神宮寺（観音堂）、鐘楼、食堂、経所、東塔、西塔、経蔵など習合の実態が確認される。このように習合化のいちじるしい鴨社だが、本地の成立は他社よりおくれ鎌倉時代で、釈迦とされた（『宇治拾遺物語』『二十二社并本地』）。

ただし重要なのは本地仏が実際に本殿へ奉祀されたのではなく、本地が釈迦という教理的な言説にとどまり、ついに仏体が御垣内に入らなかった。供僧が常置され、この状況はほぼ近世に継承された。興味深いのは近世の経所内に「明神影向所」と称する、神体を置かない神祇勧請の座だけがしつらえられていたことである。当時の供僧は山門、寺門、当地の六口に仲座三人が加わった。しかし神仏分離令によって、八講会などの仏事・法会の廃止、供僧たちの本山への帰還、堂舎と仏具の撤却が断行された。僧たちには金品が渡され、日吉山王社のごとく破壊や粗暴のふるまいはなかった。鴨社の特徴は限定的な神仏習合であって、本地仏が本殿内に入らず神仏の隔離意識が貫徹していた。

第二節　祇園社の成立と観慶寺

祇園社は陰陽系祭神である牛頭（ごず）天王などをまつる宮寺で、創始は僧円如の神託による。平安京のあたらしき神として、陰陽・仏・神の複合体で独自の道を歩み、平安時代中期は神仏習合の熟成期にあたり、その背景のなかで宮寺として鎮座した。本論では観慶寺に着目し、祇園社の研究にさいし、同寺は本社と相添うごとく並立した重要な存在ながら看過されてきた。同寺を神宮寺とみるか否か問題である。一般論として神宮寺の本尊は本社祭神の本地仏とは限らなかった。むしろ神宮寺本尊とは関係なく十一面観音などが多い。しかし観慶寺本尊は薬師如来であり、本社祭神の本地は薬師であったから本地関係にあり、その性格は本地堂といえよう。祇園社は十世紀前半に（牛頭）天王と婆梨女（ばりめ）などを祀る「神殿」と薬師をまつる「堂」が並立していた。当初は南都系であったが天台化し八講、安居会（あんごえ）を創始、『元徳古図』によれば、さらに常行堂、鐘楼、仁王像の南大門、如法経塔を配し、観慶寺はこれら堂塔の中核として神仏分離まで継続した。

第三節　天竜寺の鎮守社霊庇廟について

洛中で鎮守社のない寺院は本願寺などを除いて皆無にひとしい。既述の通り、仏教側はほんらい必要のない神

祇を自己空間に祀った。ところが神祇を補完的に扱うことによって信仰的に寺院の安定を確保した。平成十六年、旧天龍寺境内の一角が発掘され、鎮守社霊庇廟の遺構の一部があらわれ、これを機にあらためて鎮守社の事例として検討を加えた。夢窓疎石が天龍寺創建にさいして八幡大菩薩が夢にあらわれ、天龍寺を守るとの託宣を得て康永三年（一三四四）に霊庇廟を造立する。八幡神は、不遇の崩御をとげた後醍醐天皇にとって祖神であり、また同天皇を攻めた足利尊氏も氏神である八幡神の前で挙兵したように、じつは共通の神であった。天龍寺は同天皇の慰霊のための寺院であるが、鎮守社を相添えることによって、より完璧な鎮魂の装置として機能した。寺院内鎮守社の典型的な事例として例示した。

以上が、本書の概要と構成である。

仏名会　205, 222
不動明王　94
『文治二年神宮大般若転読記』　173

へ

『別忌詞』　164

ほ

放生会　269
『豊鐘善鳴録』　261, 264
『北嶺行者賀茂祭参拝口上覚』　318
法華経　171
法華三十講　222
法華八講　269
本地垂迹　4, 40, 84, 110, 351
本地垂迹説　18, 34
本地堂　42, 339, 348, 351, 352
本地仏　19, 20, 42, 54, 68, 176
『本朝月令』　55

ま

舞殿　299
『松尾社一切経』　122
『松尾神社絵図』　55
末法思想　171, 177
政所　304

み

『御祖神社御事歴以下明細調記』　319, 323, 325, 328
『御堂関白記』　117
御読経所　221, 225, 232, 233
宮寺　13, 21, 42, 69, 340
『宮寺縁事抄』　66, 67
宮寺型神社　254
明神影向所　310, 311, 312
『妙法院日次記』　321, 323
弥勒寺講師　262

む

『夢窓国師塔銘』　73, 357

め

『明治維新神仏分離史料』　324

も

『門葉記』　95, 96

や・ゆ・よ

薬師如来　44, 61～63, 67, 85, 87, 90
『八坂神社絵図』　342, 348, 351
『康富記』　87
『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』　358
『山城名勝志』　228
唯識論　137
維摩会　100, 101
影向山王　64, 65, 312
影向の間　102
『擁州府志』　314
『吉田家日次記』　361
吉田神道　301

ら・り・る・れ・ろ

来神畳　65
落飾入道　170
『暦応資聖禅寺造営記』　357
龍熙近　162
『梁塵秘抄』　246
臨終出家　165, 168～170, 224, 241
『類従三代格』　111
礼堂　341, 342
『鹿苑日録』　301, 303, 304
六所明神　94

わ

『若狭国鎮守一二宮縁起』　238, 239
『若狭国鎮守一二宮神人絵系図』　237
『若狭国鎮守一二宮社務代々系図』　237～239, 244, 253

鎮守社 7, 18

つ

『津守氏昭記』 184
『津守家家系』 182
『津守家家伝』 181
『津守氏古系図』 179, 180, 182

て

『帝王編年記』 288
天神堂 339
『天台延暦寺座主円珍伝』 58
天台座主 138
『天台座主記』 261
『天龍開山夢窓正覚心宗普済国師年譜』 357

と

道行願経 108, 111, 125
『当寺十一面縁起』 198
道場 18, 53
『東大寺縁起』 81
東大寺勧進 131
『東大寺雑集録』 343
『東大寺山堺四至図』 82
『東大寺諸伽藍略録』 79, 80
『東大寺要録』 72, 73, 75, 76, 79～82, 175
東塔 298
『東宝記』 73
読経所 302～304, 306, 308～310, 312, 317, 328
『豊受大神宮禰宜補任次第』 168

な

長屋王発願経 108
『奈良名所八重桜』 79
『南柯記』 227
難陀龍王 91～93

に

『二月堂縁起絵巻』 80
『二月堂修二会修中日記』 82
『二月堂曼荼羅』 78, 79, 81
『二十二社註式』 335, 337, 339, 340, 343, 350
『二十二社并本地』 300
『入唐求法巡礼行記』 196
二宮権現 94
『日本書紀』 179
入道神主 192, 224, 225, 230, 233

ね

禰宜尼 256

は

『白山之記』 144, 145
白山妙理権現 121
『長谷寺縁起剥偽』 92
『長谷寺縁起文』 92, 93
『八幡宇佐宮御神領大鏡』 272
『八幡宇佐宮御託宣集』 266
「八幡大菩薩御影」 75
八幡大菩薩 67, 86, 88, 358, 363
八幡大菩薩神影図 7
八講(会) 236, 310, 314, 318, 328, 329, 347
『祝館年中祝儀之次第并下行之事』 317

ひ

彼岸所 43
百座仁王会 148, 156
『百錬抄』 298, 341
『兵範記』 298
日吉大宮権現 93
日吉御幸 138
『日吉山王権現知新記』 316
『日吉山王垂迹曼荼羅図』 98
『日吉社禰宜口伝抄』 65

ふ

笛吹大明神 123
不断経衆職 304
仏教公伝 35, 107
仏神 177
仏法の息 161, 175, 176

『小右記』 290, 291, 299
鐘楼 234
『続日本紀』 73, 91, 162
『諸国一見聖物語』 65
『書写山行幸記』 44
神祇勧請 7, 12, 95, 97, 100
神祇奉斎 51
神祇法楽(経) 114, 222
『神境紀談』 132
神宮祭主 163
神宮寺 7, 18, 42, 51, 52, 57, 90, 232, 234, 306
『神宮寺伽藍縁起並資財帳』 52
神宮寺神主 10, 228, 231, 233
神宮寺本尊 19, 20, 51
神宮禅院 63, 64
『神国決疑編』 162
『神護寺伽藍図』 89, 90, 91
『神護寺々領牓示絵図』 89
『神護寺略記』 85, 87, 88
神社行幸 22, 23, 36, 42, 45～48, 133
『神社私考』 239
『新抄格勅符抄』 128
神身離脱 112
神前読経 8, 10, 72, 114～117, 128, 131～133, 139, 144, 145, 150, 156, 173, 220～222, 232, 250
神殿 341
『神殿舎屋間数及沿革取調張』 332
神道五部書 161
神風仙大神 108, 109
神仏双修 9
神仏の隔離 34
神仏分離(令) 4, 319, 320, 324, 326, 344, 350
神名帳 82, 83, 84

す

垂迹曼荼羅 98
『末広氏系図』 258
『祐直卿記』 321
『住吉社神主并一族系図』 180, 181
『住吉松葉大記』 180, 181, 186, 188, 189, 191
『住吉神領年紀』 207
『住吉大社神代記』 207
駿河国惣社 152

せ

千手観音像 94

そ

草庵 64
僧形八幡神像 74, 75, 88
惣社 142, 151
惣社宮司 152
惣社別当 154, 155
僧尼拝所 132

た

大黒天 61～63
大乗会 191
『太神宮諸雑事記』 162, 175, 177
大日如来 55, 58
(大)入道神主 10, 223, 224, 233
大般若経 8
大菩薩御体 67
「互の御影」 86
他国の神 21, 35, 41, 177
『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』 112
多度大菩薩 53～55
玉宮大明神 121
『為房卿記』 142

ち

『親長卿記別記』 301～303
「知識優婆塞貢進文」 281
『智証大師伝』 137
薙髪入道 169
『中右記』 295, 297
長日大般若経 125
『長秋記』 56～58, 295, 297
『張州雑志』 62
『朝野群載』 72, 73
『鎮国灌頂私記』 98

経所 295, 297, 321, 332
経蔵 9, 156, 157, 192, 294, 295, 297
経塚 171, 176
経筒 171
『清水寺縁起』 340

く

救世観音 175
久能寺文書 152
熊野権現 100

け

『渓嵐拾葉集』 64, 65
検校職 268
『元亨釈書』 196, 358
元寇の役 197
「還俗神主」 202
『元徳二年三月日吉社並叡山行幸記』 42

こ

『興正菩薩行実年譜』 198
『皇大神宮儀式帳』 163
『江談抄』 175
高野春秋 73
『厚覧草』 62
牛王宝印 320
国衙儀礼 157
国衙祭祀 9, 142, 144, 156
国司神拝 156
国分寺供僧 250
国分寺別当 155
『古今著聞集』 196
御斎会 144
『古事談』 300, 301
『後拾遺往生伝』 296
牛頭天王 21, 336, 343, 349
御前検校 273
五部大乗経 191, 192, 204
護摩堂 306, 308, 310
御連歌式会 100
『今昔物語』 339
根本堂 87

さ

斎院 288
祭主 165, 166
最勝講(最勝八講) 144, 270
西大寺与秋篠堺相論絵図 73
西塔 298
『坂翁大神宮参詣記』 132
座主宮 319
山王権現 94, 99
『山王七社早尾大行事絵図』 65
山王神輿 138
山王垂迹曼荼羅 99
山王曼荼羅 97, 98
山王礼拝講 346, 348, 138, 222

し

寺院行幸 24, 31, 35～37, 39～41, 45, 47
慈恩会 101
思古淵明神 94
時宗 99
地主権現 94, 95
『七大寺巡礼私記』 101
『時範記』 142, 145, 148, 152
『下鴨神領配分目録』 314
釈迦牟尼仏 97
『社家条々記録』
335, 337, 343, 345～347, 352
社寺行幸 38, 42
社僧 176
『社務補任記』 216
『授一乗菩薩灌頂受戒法私記』 99
十一面観音 20, 78, 83, 85, 91, 92
粛敬の至 162
修正会 303
出家神主 10, 11, 164, 165, 168, 170, 177, 185, 186, 189, 193, 202, 207, 233, 238, 249, 252
修二会 77～79, 81, 82
小経所 232, 233, 328
『承平実録帳』 73, 84, 85, 87
常満供僧 11, 237, 242～244, 248, 250, 253

【事　項】

あ

顕御神(現御神)　24, 47
安居会　347
『熱田社古図屏風』　62
『熱田神宮古絵図』(『享禄古図』)　60
天照大神　28, 41, 46, 47, 91, 93, 129, 247
阿弥陀如来　52, 68, 85, 171

い

異国の神　35, 36
『伊勢参宮名所図会』　132
『伊勢太神宮参詣記』　129
伊勢大神　92, 109, 125
一宮　142
一切経会　187, 204, 206, 223, 270
『一遍上人絵伝』　99
『到津系図』　260, 262
忌言葉　129
忌詞　163, 164
『石清水院開帳記』　87
『石清水八幡宮御指図』　67

う

植木宮経　123
『宇佐宮大神氏系図』　258
『宇佐氏系図』　271
『宇佐大宮司宇佐氏系譜』　258
『宇佐託宣集』　262
『宇治拾遺物語』　300
雨宝童子　91～93
『漆嶋氏系図』　258, 263

え

『叡山大師伝』　63, 64, 114, 259
『園太暦』　360
『延暦儀式帳』　163, 165

お

『応永釣命絵図』　359, 360
大鳥大明神　121
大山咋神　65
『男山考古録』　67

か

『戒灌授法』　98
戒灌頂　7, 97, 99
『戒灌伝授次第』　98
返祝詞　27, 29, 30, 148
夏季御八講　271
『春日権現験記絵』　136
『春日宮曼荼羅』　135
春日明神　91～93, 136
春日影向之間　312
『葛川縁起』　94
『葛川与伊香立庄論争絵図』　94
『上賀茂神社絵図』　220, 225, 229
神御像　52～55
『烏邑県主纂書』　307, 314, 321
賀茂大神　129
賀茂行幸　24, 25, 28, 291
賀茂斎院　217
『賀茂社家系図』　215
『鴨神殿舎屋弁名所旧跡』　315
『賀茂注進雑記』　232～234
賀茂祭　279, 287, 291, 328
『賀茂御祖神社絵図』(『鴨社古図』)
25, 214, 293～295, 299, 308
『華洛細見図』　351
『辛嶋系図』　264
河合小経所　306, 308
川合宮一筆経　122
『観慶寺勧進帳』　344
神館　25
『寛平年中日記』　76

き

祇園御霊会　345
季読経　117

筥崎宮 124, 125
箱根神社 53, 54
長谷寺 7, 91～93
八幡神 86
飯道神社 77～79

ひ

比叡山(延暦寺) 44, 45, 58, 86
彦山 264
常陸国総社 155, 156
比咩神宮寺 262
日吉根本塔 262
日吉社
31, 32, 34, 43, 119, 137, 138, 222, 262, 326
日吉神宮寺 63, 64, 306, 312
平岡八幡宮 73, 87～90
比良木社 295
平野社卜部 361

ふ

府南社 144, 145

ほ

法鏡寺 259
法興寺 199, 258
法泉寺 173
宝満寺 122
法華寺 200
法勝寺 96, 99, 191

ま

松尾社 55, 56, 122, 356
松尾神宮寺 55, 56, 58, 59
松尾大日堂 55
満願寺 120

み

三井寺 328
三島社 150
三谷廃寺 306
御手洗川 226
明王院 94
妙観寺 10, 226, 231, 233
妙法院 321, 322
弥勒寺
68, 218, 256, 257, 259, 266, 268, 269, 306
弥勒禅院 257
三輪社 46
三輪神宮寺 118

む

無動寺 94, 202

や・ゆ・よ

薬師寺 40, 54
薬師如来 86
休ケ丘八幡宮 73
安羅神社 150, 151
遊行寺 99
弓削寺 40
柞原八幡宮 124, 260
吉田社卜部 361

ら・れ・ろ

来迎院 155
霊庇廟(天龍寺) 73, 354～364
蓮台寺 173
六郷満山 267, 268
六社明神(広隆寺) 73

わ

若狭神宮寺 112, 242
若狭彦・若狭姫神社 237
若狭彦神社 11, 245, 246, 248～250, 252
若狭姫神社 11

荘厳浄土寺　204
聖神寺　10, 217～220, 232, 286, 289
正伝寺　10, 228
浄土寺　37, 194, 196, 199, 204
常明寺　130, 173
常楽寺　108
松林院　329
青蓮院門跡　95
書写山円教寺　44, 45
神願寺　84
神宮寺　246, 250, 253
神宮寺(観音堂)　10
神宮寺池　224
神宮寺西塔　197
神光院　10, 227, 228, 233
神護寺　7, 84, 86, 90, 96
新薬師寺　312

す

崇福寺(志賀山寺)　37
住吉社　46, 179, 181
住吉神宮寺
10, 112, 196, 197, 199, 204, 206, 218, 257
駿河国惣社　144
駿河国尼寺　154
駿河国国分寺　154
駿河国惣社　151

せ

石水院　87

た

大安寺　40, 65, 198, 199
大覚寺　173
大極殿　116, 117
大蔵寺　120
大福田社　62, 63
大蓮寺　344, 350, 352
高田寺　86
瀧蔵権現　92
多田寺　245, 246
多田薬師堂　11, 242, 244, 250, 253
多度神宮寺
21, 52, 55, 112, 113, 174, 218, 239
多度神社　53
田宮寺　173
手向山八幡宮　72

ち

知識寺　39
長安寺　267
鎮守八幡宮(東大寺)　7
鎮守八幡宮(大安寺)　72
鎮守八幡宮(東寺)　73
鎮守六社権現社　267

つ

月読社　58
津守寺　195, 199, 207

て

鉄舟寺　152, 153, 155
天覚寺　130, 173
天神堂　343
天龍寺　354～364

と

東大寺　37～40, 43, 129
東大寺(鎮守)八幡宮　88, 368
栂尾社　66
轟宮　120

な

内侍所　247

に

丹生川上雨師神社　116
丹生社　123
二月堂　7, 77, 82, 84
二宮　94
若王子社　175

は

白山宮　144, 145

岡本堂 286, 288～290
小倉池廃寺 259
遠敷社 77, 78, 80, 81
小浜八幡宮 250
御許山 274
御物井河 220

か

加賀国惣社 145
笠置山 43
香椎宮 23
鹿島神宮寺 53, 54, 111～113, 218, 306, 368
春日社 23, 46, 101, 118～120, 135～137
葛川明王院 7, 93～95
竈門山寺 114
上賀茂神社 214
神坐山 112
上社神宮寺 134, 220, 229, 230
亀山殿 356
賀茂社 46, 132, 133, 247
鴨社神宮寺 290～293, 299, 303, 304, 316
賀茂神宮寺 223
鴨御祖社 115
河合社 299
川原寺 37
歓喜寺 321
観慶寺 336, 339, 341, 344, 345, 347～352
感神院 341

き

祇園社 336, 338, 343
清水寺 339
金鐘寺 37

く

久能寺 153
求菩提山 263, 264
熊野山 265

け

気比社 115
気比神宮寺 218

こ

甲賀寺 37, 38
弘合堂 199
高山寺 87
興成社 77, 78, 80, 81
興福寺 43, 100, 101, 129, 137
高野山 249
神山 228
粉河寺 123
虚空蔵寺 259
国分寺 11, 248, 253
国分尼寺 153
護国寺 66, 67, 69
小町経塚 172
金剛証寺 172
金剛峯寺 123
誉田八幡宮 117
根本中堂 44, 344, 345

さ

西教寺 7, 96, 99
西大寺 40, 197～199, 203, 206
西林院 190
西林寺 196, 197, 201
座摩社 200
山階寺 100
山福寺 151
三昧堂 194, 204

し

慈恩寺 190, 190, 201, 203
獅子窟寺 86
四社明神(金剛峯寺) 73
地主権現 90
地主神社 94
下鴨神社 214
下社神宮寺 133, 134
修福寺 149
十五所大明神(西大寺) 73
十禅師 122
成覚寺 130

能久　227

ら・り

頼厳　264
頼厳上人　263, 264
頼盛　199
隆盛　199
良照　200
良然　200

わ

度会貞任　168
度会高康　169
度会彦常　169
度会雅言　169
度会光忠　130
度会宗常　171, 172
度会康雄　166, 168
度会康晴　168

【社寺・地名】

あ

開口神社　312
朝熊山経塚　9, 171, 172
飛鳥寺　35～37, 47
熱田神宮　60
熱田神宮寺　59, 60, 62, 63
阿弥陀寺　199, 207

い

石山寺　198
出雲大社　115
伊勢神宮　93, 129, 130, 161
伊勢大神宮寺　162
石上神宮　129, 134
櫟谷社　359
厳島社　115
因幡国　148
稲荷社　46
新熊野社　265
石清水八幡宮　23, 65, 66, 115, 116, 118, 155, 197

う

宇佐宮　65, 115, 116, 254, 255～257, 260, 266, 270, 274
宇佐神宮寺　122, 256, 268
有度八幡宮　154, 155
宇倍宮　147～149, 152

え

延暦寺　42, 43, 45, 206, 221, 222, 242, 243, 249, 260, 261, 265, 322, 326, 328, 329, 344

お

逢鹿瀬寺　162
鷹合堂　195, 199
大原野社　217
大神神社　118

増盛 200
増命 194
尊雲法親王 42, 43
尊円親王 95
尊珍法親王 43

た

待賢門院 298
平時範 145
卓然 201
橘諸兄 38
湛忍 196

ち

智証大師円珍 58, 59, 138
知仁 264
重源 88, 129, 130, 173, 174
長玄 251
朝盛 198
長盛 207

つ

津守国貴 192
津守実盛 195
津守證盛 195
津守忠連 193, 194
津守忠満 164, 185
津守長盛 187
津守盛宣 191
津守順盛 196

て

伝教大師(最澄)
63, 64, 98, 137, 259, 260, 344
天台大師 98
天武天皇 35～37, 41, 47

と

道鏡 40
道行 8, 108, 110, 113, 368
徳道上人 91
利景 241
豊国法師 256

な・ね・の

梨木祐之 305
禰宜男床 217, 218, 287, 289
禰宜匡長 43
能盛 195

は・ひ・ふ・へ・ほ

秦頼親 122
日野富子 95
藤原為隆 296
藤原親長 302
藤原鎌足 100
藤原道長 25, 133, 220
文観 43
平城天皇 288
朋音 203
朋元 203
法蓮 256, 257, 264, 265
法教 174
堀河天皇 43

ま・み・む・め・も

満願禅師
8, 21, 48, 54, 55, 111～113, 125, 174, 368
三津首百枝 63
源顕兼 300
源頼盛 149
明達律師 204
無学祖元 358
夢窓疎石 13, 362, 363, 354
宗良親王 43
明達 196
護良親王 43
盛宣 192

や・ゆ・よ

保久 223, 224
幸平 226, 231
遊行上人 100
用明天皇 177

国平　205
国冬　205
国道　206
国基　203

け

経国　204
恵尋　99
恵鎮　97
源意　200
玄基　198
源実　202
元正上皇　37
源助　202
厳盛　199

こ

後一条天皇　25, 29, 28, 133
光慧　266
光景　249
孝謙(称徳)天皇　39, 41, 47
孝謙天皇
光厳上皇　360
光清　268
御宇多上皇　42
弘法大師　88, 89
光明皇后　37, 39
後柏原天皇　297
国業　196
国盛　204
後嵯峨上皇　356
後三条天皇　346
後白河天皇(上皇)　45, 85, 247, 265
後醍醐天皇
42～45, 47, 354, 356～358, 360, 363
後陽成天皇　97
後冷泉天皇　221

さ

嵯峨天皇　217, 286, 287
実忠　82

し

慈威和尚　97
慈恩大師　101
慈覚　98
慈恵　98
慈恵大師　95, 97
重助　223
重忠　224
実瑜　197
修乗坊長吏行春　44
春首座　203
淳和上皇　170
淳和天皇　288
淳仁天皇　40
経覚　198
照恵　199
貞慶　174
松首座　203
照盛　200
称徳天皇　40, 91
聖武天皇　37～41, 45, 47, 74
性瑜　197～198
白河上皇　34
神叶　272, 273
信助　201
真盛　98
真智(上人)　97, 98

す

祐綱　227
資保　225
朱雀天皇　47

せ

盛円　195
性空上人　45
宣覚　195

そ

相応(建立大師・和尚),　93～95
宗覆　201

索　　引

【人　名】

あ

阿部内親王　38
荒木田重頼　166
荒木田成長　130, 173
荒木田忠延　172
荒木田忠元　167
荒木田経仲　168
荒木田時盛　171, 172
荒木田延明　168
荒木田延平　167
荒木田延満　166
荒木田満経　166, 167
荒木田元満　168

う

宇佐相方　262
宇佐氏　257
宇佐貞節　262
有智子内親王　217, 287
梅辻職久　305

え

叡尊　174, 197, 198
円観　43
円仁　196
延鎮　340
円如　13, 335, 337, 342, 343, 350

お

応神天皇　271
大江匡房　175
大江通国　149, 150
大神朝臣杜女　256
大神比義　274
大中臣千枝　173
大中臣永頼　165, 173
大中臣国雄　163, 165
大中臣輔親　166
女禰宜　265

か

快慶　88
覚源　196
覚成　202
景継　248
景直　251
景正　240
笠臣節文　239
鴨県主黒人　281, 282
鴨県主道長　284
鴨禰疑白髪部防人　283, 284
桓武天皇　287
甘露寺親長　303

き

義海　260
行円　228
行教　115, 116
行教律師　65, 66
経厳　199
行盛　199
金亀和尚　260
欽明天皇　17, 35, 367

く

空海(弘法大師)　86, 88, 89
国昭　189
国繁　202
国助　205
国夏　206

◎著者略歴◎

嵯峨井　建（さがい・たつる）

1948年　石川県生
國學院大學神道学専攻科修了
神道学博士（國學院大學）
賀茂御祖神社禰宜・京都大学非常勤講師・京都國學院講師
主要著書に『日吉大社と山王権現』（人文書院，1992年），
『満州の神社興亡史』（芙蓉書房出版，1998年）など

神仏習合の歴史と儀礼空間

2013（平成25）年1月20日発行

定価：本体8,600円（税別）

著　者　嵯峨井建
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-751-1781（代表）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

©T. Sagai

ISBN978-4-7842-1671-0　C3021